

書評

高橋昂輝：『多文化都市トロントにおける移民街の揺動—ジェントリフィケーション・私的政府BIA・ローカル政治』明石書店, 2025年3月刊, 299p., 5,400円（税別）

本書は、カナダ最大の都市であり、かつ世界有数の多文化都市であるトロントをとりあげ、そこにポルトガル系移民が形成した移民街「リトルポルトガル」を研究対象とした著作である。移民街ということから、エスニック地理の専門書と思いつきや、リトルポルトガルをめぐり1970年代以降展開されるジェントリフィケーション、都市政策、さらにはローカル政治をも射程とする重厚な都市研究である。これほど多岐にわたる現象をカバーしつつ、本書はポストモダンなトロントをどのような都市として描こうとしているのか。5部12章により構成される本書を、その構成にしたがつて読み解いていこう。

冒頭の第Ⅰ部を本書の目的（1章）、既往研究の整理（2章）、研究方法（3章）の解説に充て、それを受けた筆者は、第Ⅱ部において、ポルトガル系住民コミュニティの特徴と移民街リトルポルトガルの形成史の解説から着手する。まず、カナダとトロントの多民族な状況を解説するにあたり国勢調査などを活用し、ポルトガル系住民を国家と都市の多民族な状況に位置付ける作業から開始する（4章）。さらに、大航海時代から現在にいたるポルトガル人の移住史と、研究対象である移民街リトルポルトガルの形成史を、文献資料に依拠して解説している（5章）。1960年代頃から本国のサラザール独裁政権による圧政などの政治的背景によりポルトガル人の移住が盛んになりダウンタウンにポルトガルディアスボラが形成された

こと、1970年代以降の国家レベルで二言語多文化主義が採用され多様性に寛容な環境が生じたこと、1980年代にトロントがモントリオールに代わり人口規模首位都市になったこと、そのうえでトロントに経済活動と移民が大量に流入し多様な出自を持つ集団が集積しポルトガル系住民もその一翼を担ったことなど、送出国・受入国両者の事情を織り交ぜつつ秩序だって説明しており、トロントにおけるリトルポルトガルの地理的・歴史的位置づけを、都市・国家・世界レベルで理解することができる。後出のアンケート結果にも反映されているが、カナダに向かったポルトガル移民の多くが、アゾレス諸島やマデイラ諸島などのポルトガル領大西洋島嶼部の出身であることが興味深い。当時の政治環境の影響もあるが、農漁業に依存せざるをなかった島嶼部の貧困が背景にあるのであろう。

第Ⅲ部では、トロントの都心部におけるリトルポルトガルの形成過程と、近年進行しつつある大都市圏レベルでのポルトガル系住民コミュニティの空間的変容を検証している。ポルトガル系住民は、トロント市南西部のダウンタウンに集住し、そこに移民街リトルポルトガルを形成しているが、その特徴を説明するために筆者は、国勢調査などの既存資料に加え、フィールドワークで土地利用調査、景観観察調査、アンケート調査などを実施し、リトルポルトガルの移民街としての特徴と立地要因を複眼的に解説している（6章）。ここで筆者は、19世紀後半以降イタリアからの移民が形成したリトルイタリーと、後発移民の移民街リトルポルトガルを比較し、前者においてエスニック資源の商品化が進行しているのに対し、後者では同胞内でのビジネスや連帯が未だ強固で、両者

のホスト社会との関係が異なる歴史段階にあることを指摘している。比較的新しい移民街としてのリトルポルトガルの性格を把握したうえで、電話帳を活用しての地図化作業、住民組織での参与観察やインタビュー調査などから、ポルトガル系住民のトロント大都市圏内における地理的分散を立証している(7章)。1980年以前は居住、ビジネス、同胞組織の諸機能がリトルポルトガルに集中していたが、1980年代に居住機能が北部の移民回廊や西部郊外へ流出をはじめ、1990年代中頃から同胞組織が北部へ移動し、2000年代以降はエスニックビジネスが分散するようになった。このようにポルトガル系住民コミュニティの諸機能は分散しつつあるが、住民はリトルポルトガルを拠点に3つの機能を目的に応じて活用し、コミュニティを維持しているとしている。

第IV部はジェントリフィケーションとローカル政治に焦点を当てる。BIAは「改善地区」と訳されたりするが、地区内の土地所有者と経営者が役員となり税収を活用して自治を行う地区単位であり、1970年にトロントではじめて創設され、その後カナダやアメリカ合衆国各都市に広まった。BIAが進める地域経済活性化は、居住者の社会・経済的地位上昇と地域全体の質向上、いわゆるジェントリフィケーションを誘発する。その現象に筆者は着目し、トロント市内の移民街にはエスニック集団が主導するBIAが存在すること、構成員に有力なエスニックリーダーを擁するイタリア系やインド系のBIAではエスニックな行事などをとおして地区のエスニックプランディングが進行すること、それに対して英語能力などを理由に移民一世がBIA参加を躊躇するために同胞有力者を擁しないリトルポルトガルBIAでは同じような変化は進展しにくいことを指摘している。要するに、地区レベルのローカル政治におけるエスニック集団の関与度がジェントリフィケーション

のエスニックな指向性に作用しているのである(第8章)。さらに筆者は踏み込んで、リトルポルトガルBIAにおける主体間の力学とそれにより展開されるローカル政治の分析を試みている(9章)。最近、リトルポルトガルBIAでは、ジェントリフィケーションの進行にともないビジネスを目的に流入してきた非ポルトガル系経営者が増加し、ポルトガル系経営者は減少傾向にある。こうした経営者らはジェントリフィケーションを推進する主体であるジェントリファイアと同義であるが、エスニックな景観強化や地域プランディングには主体間力学における同胞の地位や連帯、パワーバランスが重要になる。その解明のため、ポルトガル系・非ポルトガル系の経営者に質問票調査とインタビュー調査を実施し、社会心理学などで用いられる「ソシオグラム」と呼ばれる図示法を援用し、主体間のネットワークと力学の可視化を試みている。この手法を地理学で見かけることはほとんどないが、個人間の関係とその強弱を表現するには最適であり、筆者はこれによりリトルポルトガルBIAにおける経営者の関係を見事に描き出している。そこから明らかになったのは、ポルトガル系と非ポルトガル系の経営者の社会関係の独立性である。両者は空間的にはリトルポルトガルに共存するものの、インフォーマルなネットワークはほぼ独立している。設立当初の2007年のBIA代表はポルトガル系一世で、かつ役員の3分の2はポルトガル系経営者であったが、ジェントリフィケーション進行にともなう非ポルトガル系経営者の地区への流入により、BIA代表はポルトガル系二世、非ポルトガル系へと交代した。代表が非ポルトガル系となったことで、非ポルトガル系経営者間のネットワークが役員選出やBIAの活動にも影響するようになった。ジェントリフィケーションというと、住民の地位上昇であったり景観の質向上に注目しがちであるが、推進主体である個人をめ

ぐる力学に注目してジェントリフィケーションの方向性を描写する手法は斬新であり、大変興味深かった。

こうした住民間の力学は、選挙戦にも表出するため、エスニック集団に背景を持つ被選挙人と、それを巡る住民や地域の選挙行動に、移民街リトルポルトガルと多文化都市トロントの特徴があらわれる（10章）。トロント市議会のポルトガル系候補者は、選挙区制度の幾度もの改変にもかかわらず、エスニックメディアを活用して票田であるポルトガル系コミュニティを巧みに取り込みつつ1988年以降の選挙戦で存在感を示してきた。選挙人であるポルトガル系住民と被選挙人の選挙行動から、エスニックな出自が同胞の連帯を強化しつつも、被選挙人は同胞以外の選挙人を見据えてエスニシティの表出を使い分けるという。ポルトガル系の被選挙人・選挙人がこの場所で経験した記憶が、場所に根差したエスニシティの種別性を生じさせつつある現象として興味深い。

第V部では、移民一世の高齢化により変容するポルトガル系住民コミュニティの姿を追求している（11章）。1960年代以降移住した移民第一世代はライフステージの後半にあるが、高齢にもかかわらず様々な理由により送出地と頻繁に往来する。そこにはカナダにおける年金受給、送出地の血縁者や地縁者との連帯維持といった高齢者ならではの戦略が見え隠れする。せっかくであるから、アゾレス諸島やマデイラ諸島の移民一世の原風景をのぞいてみたいという欲にかられた。大西洋をまたいでのフィールドワークに期待したい。

本書の読後感であるが、都市を舞台としたエスニック地理学研究を、ジェントリフィケーションや政治地理学と連携する方法を提示したという観点の斬新さが印象的であった。ますます多民族化が進行するグローバルシティをめぐる都市現象を、ポストモダンな切り口から観察するためのヒント

を与えてくれる。その点で、エスニック地理や都市地理に関心を寄せる諸氏にとって従来にない着眼点を示唆してくれる秀作である。同時に、よくぞここまで現地のポルトガル系住民コミュニティに入り込んでフィールドワークを実践した、と感服した。海外フィールドワークの経験のある研究者なら、研究対象のコミュニティとの関係を築くことが最初の難題であることは熟知している。それにもかかわらず筆者は、聞き出すのに苦労することを容易に想像できる個々人の政治的嗜好からライフイベントといったきわめて個人的な情報まで収集している。学部生時代からトロントをフィールドとしているとはいって、よほど労力をかけなければ、ここまで現地住民とラポートを築くことはできない。本書は、海外フィールドワークに携わる研究者には共感と新たな知見をもたらしてくれるであろう。これから海外調査を目指す若い研究者には、ぜひ精読してほしいフィールドワークの手本となる労作である。前途ある筆者の益々の活躍に期待したい。

（石井久生）

池田千恵子：『歴史的建造物の再生とツーリズムジェントリフィケーション』古今書院、2025年3月刊、211p., 3,000円（税別）

近年、インバウンド、オーバーツーリズム、空き家、まちづくりなどは、地理学の論考でなくとも、ニュースやネット記事でよく目にする言葉である。本書は、これらの現象に対し、ツーリズムジェントリフィケーションという視点からアプローチした試みといえる。あとがきにもある通り、著者が仕事と大学院生という「二刀流」で千辛万苦の末に書き上げた10編の論文を基に、序章と終章の2編を加えて構成されている。本書の構成